特集　図書館ガイダンス

導入教育と図書館ガイダンス

本間里見

□　大学における課題探求型の自主的な学習は、受験のための知識習得型の学習が中心であった高校までの受身の学習とは大きく異なる。この学習方法のスムーズな転換を促すために多くの大学では、一年次に導入教育を実施している。

この導入教育においては、情報活用能力や問題解決能力を育成することは重要な課題である。

2000年11月22日の大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」において、グローバル化時代を担う人材として、学際的・複合的視点に立って自ら課題を探求し、論理的に物事をとらえ、自らの主張を的確に表現しつつ行動していくことができる能力が必要としている。また、そのためには主体的に情報を収集し、分析し、判断し、創作し、発信する能力を養うことが不可欠であるとしている。

すなわち大学教育にとって、広義の情報リテラシーの必要性を意味している。（情報リテラシーは、コンピュータリテラシーと同一視されることが多いが、ここではアナログメディアを含めた情報活用能力の育成を指す）この広義の情報リテラシーは、今後、ますます大学における学習の柱となるであろう。

□　本学では、情報リテラシー科目として、一年次に情報基礎A・Bが必修科目として設定されている。この科目は、総合情報基盤センターによって、しっかりとしたカリキュラムで実施されており、コンピュータリテラシーの取り組みとしては高い評価が得られている。

一方で、大学教育のオリエンテーション科目として、基礎セミナーが設定されている。基礎セミナーでは、教員が設定したテーマで少人数クラス（20名）を編成し、大学のイントロダクションや基礎的なスタディスキルズ（調べる、書く、発表する、討論する、等）の習得により、大学教育への導入を目指すものである。テーマはバラエティに富んでいるが、発表や討論が中心の授業が多く、それらの授業では担当教員から、それぞれの工夫の元に文献の検索方法や活用方法が教授されている。

しかし、情報基礎A・Bと基礎セミナーだけで、広義の情報リテラシーは十分とはいえない。情報基礎科目は、コンピュータリテラシーが中心であるし、基礎セミナーは、討論や発表が中心で、その下調べに必要な情報の集め方や活用方法等のスキルを系統的に学習しているわけではない。広義の情報リテラシーは、やはり、図書館と連携して実施するべきであると考える。

□ 本学の新入生の状況はどうであろうか？基礎セミナーの授業アンケート[注1]から新入生の考え方がみえてくる。表1は、学生からの基礎セミナーへの要望である。まず、「他学部の人と議論できる工夫」、「内容や教え方などを工夫して欲しい」といった授業運営に関する要望が挙がっている。ここで注目すべきは、「参考文献を多く紹介して欲しい」が続くことである。

（表1）今後、基礎セミナーを改善し充実するために、授業担当者（教員）への要望を挙げて下さい。（複数回答可）

内容や教え方などを工夫して欲しい	19.8%	課題を設定し考える時間が欲しい	9.6%
資料を準備して欲しい	9.8%	参考文献を多く紹介して欲しい	15.4%
授業に一貫性があるようまとめる	7.2%	レポートの回数を多くして欲しい	1.0%
レポートの回数を少なくして欲しい	7.3%	発表・討論を多くして欲しい	7.6%
発表・討論を少なくして欲しい	5.8%	他学部の人と議論できる工夫	22.5%
その他	11.7%	無回答	18.8%

基礎セミナーでは、レポートの作成や発表・討論のための下準備が課されることが多い。そのため参考文献が必要になるが、新入生は適切な参考文献を紹介して欲しいのである。教員から見れば、参考文献の選び方やその活用方法は学生自身が独自に獲得していくものだと考えがちである。しかし、小中高校までの学習の中で、必要な文献・情報を図書館で集めるという訓練を受けてきた新入生はほとんどいないのが現状であろう。

この訓練こそが導入教育には必要であると考えるが、かならずしも情報リテラシーの専門ではない教員が、基礎セミナーで教えることには限界がある。

□ では、教員は新入生のことをどう感じているのであろうか？表2は、担当した教員の新入生一般に特に不足していると感じられた基礎的素養についての回答である。まず、「口頭表現能力」と「討論能力」が挙げられており、自分の考えを伝える能力が不足していると感じている。

新入生はゼミ形式の授業に不慣れでとまどっているということもあるが、自分の考えを説明するための下準備ができていないこと、関連する知識や経験が不足していることにも起因している。また、「一般的知識」が不足していると感じている教員も多い。

この結果からは、教員は学生にスタディスキルズよりもむしろコミュニケーション能力を求めているように思われる。しかし、スタディスキルズがなければ、発表も討論も消極的になるのは当然であり、新入生がかかえる潜在的な問題に気づいていないのかもしれない。

（表2）今年度の基礎セミナーを担当された限りにおいて、新入生一般に特に不足していると感じられた基礎的素養はどのようなものでしたか。

一般的知識	33.0%	文章の読解力	8.8%
数学的推理能力	3.3%	論理的思考能力	30.8%
直観的把握力	3.3%	想像力	23.1%
実験・実習能力	5.5%	文章表現能力	18.7%
口頭表現能力	41.8%	討論能力	39.6%
思い当たることは無い	9.9%	その他	23.1%

□ 現在の図書館は電子化がすすみ多様なレファレンスサービスを提供している。利用方法を知っていれば非常に便利になるが、利用方法の習得なしで図書館

を使いこなすことは難しくなり、利用のハードルは高くなっていると思われる。

一方で、安易にインターネット上の情報をそのまま利用したようなレポート作成も増えている。インターネット上の玉石混淆の情報から適切な情報を引き出すためのスキルも必要であるし、著作権やセキュリティの問題に対しても正しい知識が要求される。このインターネット上の情報検索技術もますます重要なスタディスキルズとなるであろう。

□ 図書館の情報化、ネット社会の浸透に伴って、スタディスキルズの内容も充実させていかなければならない。

試みとして、2004年度、基礎セミナーの１授業コマを使って、図書館ガイダンスを実施した。この基礎セミナー・図書館ガイダンスは、受講した学生も担当教員からも、おおむね好評[注2]であった。

しかし、１時間の講義形式によるガイダンスのみで情報検索のスキルは身に付くものではなく、自ら図書・資料を検索するためにOPACを使わなくては意味がない。基礎セミナーの授業の中で、図書館ガイダンスから連続して図書館活用を促すことが必要であろう。

□ 今後、本学の導入教育において、図書館と連携して広義の情報リテラシー教育に総合的に取り組める可能性は十分にある。例えば、OPACなどの操作方法などは、情報基礎の授業で実習することは可能であろう。

また、基礎セミナーにおいて図書館ガイダンスを単なる図書館利用ガイドにとどまらず、情報の検索、選択、活用、まで授業内容に系統的に取り込むことも可能であろう。すでに学術文献の収集やその活用に重点をおいた授業として、総合科目「情報メディアとネットワークの活用」も実施されている。

さらに、専門教育の中でも、ある専門のテーマについての情報を掘り下げるような情報検索のワークショップなどを設定することも可能であろう。

□ 情報化社会では、情報の鮮度が落ちるのもはやい。（もちろん、保存食のようにいつまでも食べられる情報も当然あるが）今後は、大学が学生に与えるのは、知識よりもむしろ、新しい知識を如何に獲得するか、如何に活用するか、といった方法そのものが重要となってくる。その方法こそが、学生にとって色あせない生涯の資産となるであろう。その意味で、導入教育と図書館の連携の意味は大きい。

注1）基礎セミナー授業アンケートは、2004年度前期の基礎セミナー最終週に実施した。対象は前期受講生（新入生全体の約85%）と88クラスの担当教員で、回答数は受講生が1177件、担当教員が91件であった。

注2）基礎セミナー・図書館ガイダンスについての受講者のアンケートは、附属図書館の方でまとめられ、報告されている。

（ほんま　りけん
大学教育機能開発総合研究センター助教授）

【表紙の言葉】

今号の表紙は、熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵寄合書き『源氏物語』（丑上－三）から青蓮院尊朝親王筆「桐壺」のはじまりの部分です。